



衣川 官介

## 『播磨鍋 藤原弁随 (べんずい) 』

いつごろから播磨に鑄造技術が伝わったのでしょうか？『中居鑄物史』によると河内の鑄物師の移住が15世紀から17世紀と記され、1451年～1500年には全国で32名の鑄物師が、次の50年間は人数が減少し28名が活躍したと記載されています。（梵鐘など製品に名前が記された鑄物師）

「播磨鍋買はしませ。釜もさふらうぞ。ほしがる人あらば、仰られよ。弦をもかけてさう」

『七十一番職人歌合』は、明応9年(1500)に成立したとされる中世後期最大の職人を題材とした職人歌合。六巻の左、鍋売の絵は、侍鳥帽子（さむらいえぼし）に直垂（ひたたれ）姿の鍋売が、路傍で口上を述べて鍋を売っています。

『夢通信』1月号に掲載した、津田村住の内記石根丸が『姫路総社』の銅鐘を鑄造したのは永正3年（1506）、播州国衙庄津田村住藤原弁随父子が代々受け継いできた売り場の権利を、大野郷野里村芥田五郎右衛門に飭東郡と飭西郡、東は市川を境、売却したのは30年余り後の天文7年（1538）。弁随父子が売却した売場の権利とは、有名な『しかまの市』や寺社等で毎月行われる〇〇市での販売権であり、これを手放すことは鑄物師の廃業を意味します。以降弁随の記録は姫路には見当たらなくなりました。

播磨鍋は1500年、すでに都に聞こえるほどのブランドが確立していました。この鍋を作っていたのは、津田村の職人達です。今は無い津田村の地名を探しました。姫路城から東へ1 km、JR播但線は姫路から日本海側の和田山、生野を結びます。姫路の次の駅が京口、その次が野里です。京口駅の前に小さな公園があり、旧鑄物師町跡と書かれた石碑が立っています。もう一つの黒御影石は町名由来記念碑です。その中に鑄物師の頭領、藤原弁随のことが記されています。

『王朝時代からこの辺り一帯を津田村といいその中の神谷の北裏に位置し吹屋といった。（中略）天正7年（1538年）12月 藤原弁随頭領の鑄場を芥田家久が買収して野里に移したので、その後は野里が鍋・梵鐘・鋤鍬等、鉄鑄品の中心的存在となった、以下略』

石碑裏面に書かれた世話人や寄贈者の名前に『小野某』・『大西某』・『田中某』など、野里で活躍した後世の鑄物師の姓を見出すことが出来ます。

### 参考資料

- 『中居鑄物史』 長谷川 進 昭和45年 穴水町文化財保護専門委員会
- 『七十一番職人歌合』
- 『夢通信』2018年 1月 『総社の銅鐘』
- 『夢通信』2008年 2月 『鑄物師町』

播磨鍋  
かはしませ。  
釜もさふらうぞ。  
ほしがる人あらば仰られよ。  
弦をもかけてさう。

鍋売



鍋売り



鑄物師町碑



往馬（いこま）大社の火祭り  
高良（こうら）社から大社へ  
弁随（べんずり）さんのお渡り  
火祭りではベンズリ踊を披露  
奈良県生駒市老分町

褐衣（かちえ）の弁随さん

『鉄のふしぎ博物館』  
来て！見て！ふれて！ ふしぎ体感